

放課後等デイサービスにおけるオンライン支援の効果と課題

林原 洋二郎¹・渡邊 純子²・黒川 実香²・沢辺 優³・和田 充紀⁴

The Effects and Problems of Online Support in After-School Day Services

Youjiro HAYASHIBARA, Junko WATANABE, Mika KUROKAWA, Yu SAWABE
& Miki WADA

概要

2020年3月、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)流行の影響で全国一斉に学校が休校となる中、障害のある子どもが利用する放課後等デイサービスにおいて、子どもの安心と活動の機会を保障するために新たな支援のあり方が検討され始めた。本研究では、放課後等デイサービスにおけるオンライン支援システムを活用した実践および、保護者を対象とした調査をもとに、放課後等デイサービスにおけるオンライン支援の可能性や課題、今後の地域におけるオンライン支援のあり方について検討した。子どもの特性や状態を考慮し、家庭や家族の状況に応じて支援を受ける場所や方法、内容を選択できることの有効性を含めて、子どもの活動と家族の安心につながる多様で新しい支援体系の方向性と可能性が示された。

キーワード：オンライン支援、放課後等デイサービス、発達障害

Keywords：Online Support, After-School Day Services, Developmental Disability

1. はじめに

放課後等デイサービスは、児童福祉法第6条の2の2第4項の規定に基づき、学校(幼稚園及び大学を除く)に就学している障害児につき、授業の終了後又は休業日に、生活能力の向上のために必要な訓練、社会との交流の促進、その他の便宜を供与することとされている。2012年に児童福祉法が一部改正されたことにより放課後等デイサービスが創設され、2013年には全国の事業者数3,115事業所、利用者数54,819名であったが、2020年には事業者数15,224事業所、利用者数が245,767名と急増している(厚生労働省, 2020)。2009年から2019年にかけて、特別支援学校に在籍する児童生徒数が1.2倍になったことに対して、通常学校で特別支援学級や通級による指導を利用する児童生徒数が2.2倍になってい

る(文部科学省, 2020)。放課後等デイサービスの利用者数の増加の背景の一つには、通常学校に在籍し生活への適応に困難を抱える発達障害等の子どもたちの受け皿としての利用の増加が考えられる。

政府は新型コロナウイルスの感染拡大防止を図るため、2020年4月7日に7都道府県を対象に、4月16日に全国を対象に「緊急事態宣言」を発出した。それを受け富山市では同年4月13日より、富山市立小・中学校を一斉休校することを決めた。休校に伴い、全国の学校では、オンラインによる学習機会の提供などの対応が増えた。株式会社ベネッセコーポレーションが2020年3月20日から5月8日に、全国の約2,800世帯(幼稚園の年中～高校3年生の子どもがいる世帯)に対して実施した「親子の生活における新型コロナウイルス影響調査」によると、オンライン授業を約3割が実施、オンライン未利用者の75%が利用を検討したと報告している。この結果から、コロナ感染症予防の観点より、オンラインによる支援のニーズが全国規模で高まっていることがうかがえる。

教育に加えて福祉分野においても、厚生労働省

¹富山大学大学院人間発達科学研究科発達教育専攻

²ヴィストカレッジ富山県庁前

³ヴィストカレッジ富山駅前

⁴富山大学人間発達科学部

(2020)は「事業所が居宅への訪問、感染の拡大を抑制するため、音声通話、Skype その他の方法で児童の健康管理や相談支援などの可能な範囲での支援の提供を行ったときは、通常提供しているサービスと同等のサービスを提供しているものとして、報酬算定を可能とする」とした。継続した支援の必要性の観点から、放課後等デイサービス事業所の在宅での支援も容認した形となった。

しかし、オンラインによる支援の提供に関しては、各事業所のホームページを通していくつか散見される程度であり、実践報告や研究成果は見当たらず、福祉サービス機関におけるオンライン支援の効果や課題について検討されていない。

II. 目的

コロナ感染症予防の観点より、第1・2・3・4筆者が関わる放課後等デイサービス（以下、事業所）において、オンライン支援システム（以下、オンライン支援）を開始した。研究1では、オンライン支援を利用した4名の実践における効果と課題を分析し、研究2では、オンライン支援を利用した保護者に対して実施したアンケート結果から、オンライン支援の効果と課題を分析することとした。研究1, 2を通して、事業所におけるオンライン支援の可能性や課題、今後の地域におけるオンライン支援のあり方について検討することを目的とする。

III. 研究1：オンライン支援による実践

1. 方法

1.1 対象事業所と対象児

事業所を利用する小学生（A・B・C児）と高校生（D児）の計4名（全て男子）であった。A・B・C児はa事業所、D児はb事業所を利用していた。a事業所は小学生、b事業所は中学生・高校生を対象にサービスを提供していた。両事業所はT市に位置し、母体は同株式会社であった。両事業所で運動スキル、社会スキル、生活スキルの向上を図るためにサービスを提供していた。サービスで提供する活動を「ワーク」と呼び、1セッション45分間で個別ワークと集団ワークを提供していた。対象児の概要を表1に示す。

1.1.1 A児

A児は軽度知的障害を伴う自閉性スペクトラム症と診断された特別支援学級に在籍する小学校4年生であった。ざわざわとしている環境が苦手であり、自分のやりたいことを自分のペースで進める傾向があった。親のニーズは「コミュニケーションをうまくとれるようになってほしい。得意なことや自信になることを増やしてあげたい。学校では穏やかに過ごしてほしい」であった。A児のニーズは「たくさん褒めてほしい」であった。

事業所が作成する個別支援計画における短期目標（6か月間の達成目標）は以下の3つであった。①人の役に立つ喜びや達成感を感じ、自己肯定感を育む。②自分で決めたルールを周りに相談する。③様々なことにチャレンジし、得意な事を見つける。

1.1.2 B児

B児は確定診断が無く、特別支援学級に在籍する小学校4年生であった。視覚優位であり読書やスクラッチ等のプログラミングが得意であった。通常学級では離席が目立ち授業に参加できず、予期せぬ事態に陥るとパニックになった。聴覚も過敏であった。特別支援学級に在籍した2020年4月からは、落ちついて授業を受けている。親のニーズは「中学校に入る最低限度の能力を身につけてほしい。5人以上の集団に入っていけるようになってほしい。その場に合った行動を選択できるようになってほしい」であった。

事業所が作成する個別支援計画の短期目標は以下の2つであった。①先を予測し、その場に合った行動を選択できる。②様々な体験からできること、できないことを知る。

1.1.3 C児

C児は自閉性スペクトラム症と診断された通常学級に在籍する小学校6年生であった。場面緘黙があり学校や事業所での発言が少なかったが、パソコンでの活動が好きであった。親のニーズは、「楽しんでほしい。人に伝えることに自信を持ってほしい。他の子と交流してほしい」であった。C児の好きなことはビスケット（プログラミング）やマイクラフトであった。

事業所が作成する個別支援計画の短期目標は以下の3つであった。①コミュニケーションの成功体験を積み、会話に自信をつける。②2人からの小集団ワークに慣れる。③得意なことを伸ばし、興味関心を深める。

表 1 対象児の概要

対象児	診断名	年齢 (2020.4現在)	性別	IQ (WISC-IV)	特性
A児	自閉性スペクトラム症 軽度知的障害	9歳4か月	男	58	ざわざわとしている環境が苦手 自分のやりたいことを自分のペースで進める傾向あり
B児	なし	9歳5か月	男	129	視覚優位であり、読書、スクラッチ等のプログラミングが得意 予期せぬ事態に陥ると、パニックになることあり
C児	自閉性スペクトラム症	11歳9か月	男	情報なし	場面緘黙あり、学校や事業所での発言は少ない パソコンでの活動が好き、答えが明確な課題は得意
D児	アスペルガー症候群	15歳1か月	男	101	生活リズムが不規則になりやすい コミュニケーションは比較的良好、物作りや絵を描くことが得意

1.1.4 D児

D児はアスペルガー症候群と診断された通信制高校に在籍する1年生であった。生活リズムが不規則で昼夜逆転していた。コミュニケーションは比較的良好で物作りや絵を描くことが得意であった。親のニーズは「生活リズムを整えてほしい」であった。D児のニーズは「人のために役立ちたい」であった。

事業所が作成する個別支援計画の短期目標は以下の3つであった。①定期的に事業所に通所する。②事業所で様々な体験をし、自立に向けた経験と知識を積む。③事業所に通所するために来所前の身だしなみを整える。

1.2 スタッフ

一事業所のスタッフは20代～40代の8名であり、作業療法士、公認心理師、介護福祉士、教員免許取得者等であった。担当スタッフが個別支援計画の作成や保護者との面談を実施しているが、ワークでは毎回違うスタッフが実施した。

1.3 期間・手続き

オンライン支援は2020年4月から8月まで実施した。2020年4月時点で、A、B、D児は1年間、C児は8か月間、来所で事業所を利用していた。オンラインではZoomを使用した。A児は5月に計7セッション、B・C・D児は8月までそれぞれ計19セッション、14セッション、11セッション実施した。8月に対象児へのアンケートと保護者へのインタビューを実施した。対象児へのアンケートでは来所支援を受けた時とオンライン支援を受けた時の感想を質問した。質問内容は①楽しい、②安心、③退屈、④好き、⑤緊張、⑥リラックス、⑦わかる、⑧気楽な、⑨疲れる、⑩静か、⑪集中、⑫できる、⑬難しい、⑭自由な、であった。「5:とても思う」～「1:まったく思わない」の5段階のリッカート尺度を用いた。③退屈、⑤緊張、⑨疲れる、⑬難しい、の4項目については、逆転項目とみなし、ポイントを5→1、4→2と反転させた。保護者へのインタ

ビュー内容は、オンライン支援を受けた感想を質問した。

1.4 倫理的配慮

保護者に対して文書を用いて研究説明を行い、研究協力の承諾を得た。文書内容は、研究目的・方法、個人情報守秘義務の遵守、情報開示、研究協力の中断であった。

2. 結果と考察

2.1 A児

2.1.1 来所支援時の様子

自分の好きな活動を自分のペースで進めていく傾向があり、自分が思ったようにならないとスタッフを叩いたり暴言を吐いたりすることがあった。自分の要求はするが、スタッフの提案は拒否することが多く、新しい活動に対しても拒否的であった。特に机上課題は苦手であり、鉛筆でひらがなを書くことはできるが、書く作業は嫌いで持続はしなかった。

2.1.2 オンライン支援の介入

オンライン支援では、様々なことにチャレンジし、得意な事を見つけることを目的とした。個別ワークに参加し、間違い探しや文字の並び替え等、見ながら考える活動を中心に実施した。全セッションで家族が同席し、多くは母親であった。

セッション1では、活動中は終始笑顔でありスタッフが提示した課題に拒否なく取り組むことができた。分からない時は、隣にいる母親の顔を見ることが多かったが、スタッフに「ヒントちょうだい」と伝えることができた。感想では「全部楽しかった」と答えた。セッション3では、間違い探しの活動で「間違い探しは苦手だけどやってみる」と意欲的に取り組んだ。セッション4では、記憶した形を鉛筆で書くことができ集中して取り組むことができた。セッション6では、タオル運動で2回失敗するも3回目成功し、成功できた時は非常に嬉しそうな表情をした。文字の並び替えクイズで分からない時に

「ヒントください」と援助要請ができた。セッション7では、画像を利用したクイズへの取り組みは良好であり、正解した時は笑顔が見られた。

2.1.3 行動変容

来所支援では苦手な活動には取り組まなかったが、オンライン支援開始時より苦手なことへ取り組むことができた。分からない時は援助要請をし、自分の気持ちを伝えることができた。成功できた時は素直に嬉しそうな表情を表出できた。

2.1.4 アンケートとインタビュー結果

アンケート結果を表2に示す。「⑤緊張」の項目では、来所支援よりオンライン支援では3ポイント低かった。家族に見られていて緊張したとコメントがあった。「⑩集中」では来所支援よりオンライン支援が2ポイント高く、「⑨疲れる」「⑩静か」の項目では、来所支援よりオンライン支援が1ポイント高かった。コロナでも運動ができ、縄跳びやクイズ等、お母さんと一緒にできたことが良かったとコメントがあった。母親へのインタビューでは「ワークの内容や様子が見られて良かった。一緒に活動をする時間がとれてよかった。父親や姉にも見てもらえて良かった」と回答した。

表2 A児のアンケート結果

項目\ポイント	5	4	3	2	1
①楽しい	●△				
②安心	●△				
④好き			●△		
⑥リラックス	●△				
⑦わかる					
⑧気楽な					
⑩静か	●	△			
⑪集中	●		△		
⑫できる					
⑭自由な					
③退屈	●△				
⑤緊張	△			●	
⑨疲れる	●	△			
⑬難しい					

● オンライン支援 △ 来所支援

2.1.5 考察

アンケート結果では「⑩静か」「⑪集中」が大きく変化した。これは環境の変化が関係していると考えられる。聴覚過敏のある自閉症スペクトラムのA児にとって、自宅でのオンライン支援は聴覚的の刺激が少なかったこと、視覚的に分かりやすかったことが考えられる。

全セッションで常に隣の母親を意識する様子が観察された。アンケート結果で「⑤緊張」のポイントが下がったが、母親が同席したことが緊張につながったと考えられる。A児と母親との関係は非常に良好で、同席したことで「大好きなお母さんにいいところを見せたい」という気持ちが、感情の表出や苦手なことへの取り組みにつながったと考えられる。

2.2 B児

2.2.1 来所支援時の様子

個別ワークでは漢字オセロやプログラミングロボットなどに取り組んだが、スタッフと1対1であればトラブルはなかった。ただ、集団ワークでは、運動やプログラミングなどに取り組んだが、活動ができないと放棄したり、ふざけている他児に対してイライラしたり、自分の思うようにならないと他児と口論となり物を投げたり等、トラブルが多かった。

2.2.2 オンライン支援の介入

オンライン支援では得意な活動を通して成功体験を得ることを目的とした。個別ワークと集団ワークに参加し、知的能力に合わせて、難読漢字や数的処理などの見て考える活動を中心に実施した。保護者が不在の時もあり、自分自身でZoomをつないで参加した。

オンライン支援を開始したセッション1から積極的に参加した。スクラッチなどのプログラミングが得意であり、オンラインに使用する機器の操作方法は早々に理解し、Zoomのオプション機能を自ら使用する場面が見られた。セッション3ではオプション機能の「OK」の合図を教えてくれたり、セッション6では仮想背景を楽しそうに選択したり、セッション14では、チャットやホワイトボードの機能を使い、スタッフに状況を伝えたりした。

セッション5では難読漢字はほとんど読むことができている、熟語にある漢字から推測（くさかんむりがあるので植物）して回答した。セッション6では隠された4桁の数字を当てるゲームを実施した。推測した数の結果から、客観的に分析してさらに次の数を推測することができた。スタッフの意見を伝えると、「それも考えられますね」と柔軟に対応できた。セッション7では、アハ体験で提示した絵（女性と老婆、馬とカエル）は、「これは見たことある」と答え、積極的に答えた。セッション9では、マッチ棒クイズを実施した。マッチ棒で提示された「16+8=9」を正しい式にするクイズであった。分から

ない他児にヒントを出すようスタッフがお願いすると快く引き受けてくれた。複雑な問題では、パソコンの画面上に矢印を出して動かすマッチ棒を示したり、×をつけたり、様々な工夫をしながら、得意げにヒントを出すことができた。

一方でセッション 17 と 18 では、ワークの時間になっても参加しなかったため、スタッフが自宅へ電話をした。2 セッションとも電話には出なかったものの、電話の音で気づき、その後、参加した。セッション 18 では非常に眠そうな顔をしていた。

2.2.3 行動変容

オンライン支援では、Zoom 機能の操作方法やオプション機能を自分で学習できた。視覚優位の能力を生かした課題に対して積極的に取り組むことができ、スタッフや他の参加者に、得意げに教える経験ができた。

2.2.4 アンケートとインタビュー結果

アンケート結果を表 3 に示す。「③退屈」「⑤緊張」「⑧気楽な」「⑩静か」の項目では、来所支援よりオンライン支援で 3 ポイント高かった。来所支援では周りのワークの音が気になるとのコメントがあった。「⑥リラックス」の項目では、来所支援よりオンライン支援で 2 ポイント高かった。「④好き」「⑦わかる」「⑨疲れる」「⑪集中」「⑫できる」の項目では、来所支援よりオンライン支援で 1 ポイント高かった。「⑨疲れる」の項目は「あまり思わない」ではあったものの、目が疲れるとのコメントがあった。

母親へのインタビューでは「通わせるのが大変だから、楽であった。Zoom の接続も自分でやるとこ

ろから挑戦していたので、分からない時はスタッフに聞くことに挑戦できて良かった」と回答した。

2.2.5 考察

「⑦わかる」「⑫できる」の項目で、来所支援よりオンライン支援では 1 ポイント高かった。これは、ワーク内容が見て考える活動が中心であり、視覚優位な B 児にとって得意な課題であったこと、プログラミングや ICT に対して探求心が強かったことから、発達特性にマッチングしていたと考えられる。発達特性にマッチングしていたことで自分の能力を発揮でき、スタッフや他児に称賛される場面があった。集団ワークにおける「自分の才能を他のスタッフや仲間に認められる」経験が、「⑫できる」でポイントの向上につながり、自己肯定感が高まったと考えられる。

「⑧気楽な」「⑩静か」の項目ではオンライン支援で 3 ポイント高く、「⑪集中」の項目では 1 ポイント高かった。聴覚過敏があるため、一人で参加できる環境は、ワークに取り組みやすかったと考えられる。

後半の 2 セッションでは、自らワークの時間に参加できなかった。自宅で行う環境に慣れたことやスケジュール管理ができていなかったことが考えられる。

2.3 C 児

2.3.1 来所支援時の様子

ワークの参加状況は月に 1 回程欠席があった。行き渋りや母親の都合、天候が悪いと欠席した。個別ワークや集団ワークでは、提示した活動には取り組むことができた。スタッフの質問に対してうなづくことはできるが、自ら言葉を発することはほとんどなかった。困っても援助要請はできず、他児がいる環境ではスタッフから質問されると困った表情をした。

2.3.2 オンライン支援の介入

オンライン支援では、得意なことを伸ばすこととコミュニケーションの成功体験を積むことを目的とした。個別ワークに参加し、動画を利用したクイズ（アハ体験、つまようじパズルなど）、プログラミング等、言語で表現しなくても画像やチャットで答えを伝えることができる活動を中心に実施した。全セッションで母親が同席した。

オンライン支援では一度も欠席がなかった。セッション 1 では、本人の希望により顔をモニターに出

表 3 B 児のアンケート結果

項目 \ ポイント	5	4	3	2	1
①楽しい	●△				
②安心	●△				
④好き	●	△			
⑥リラックス	●		△		
⑦わかる	●	△			
⑧気楽な	●				△
⑩静か	●				△
⑪集中	●	△			
⑫できる	●	△			
⑭自由な	●	△			
③退屈	●				△
⑤緊張	●				△
⑨疲れる		●	△		
⑬難しい	●	△			

● オンライン支援 △ 来所支援

さずに実施したため、モニターを通してC児の様子が見えず、スタッフはコミュニケーションを取ることが難しかった。スタッフが提示した活動には取り組むことができた。セッション2では「顔は出したくありません。絶対に無理！」とスタッフにチャットで伝えた。セッション4では、始まりと終わりのみモニターをつなげ顔を見て挨拶することができた。セッション6では、つまようじパズルを実施したが、モニターをつなげて手元を映した。顔を映さなければ、モニターをつなぎ続けることができた。つまようじパズルが終了した後、「入れ替え文字をしたい」という自発的な発言が見られた。クイズの実施の時、問題に対して「あれ、これって？」という声を出したり、声を出しながら笑ったりする様子も見られた。セッション9では、セッション終了時に母親が「1度で聞き取ってもらえたため、自信がついてたくさん話せていました」と述べた。セッション11では、質問に答える形で「もう一度見たい」「分からなかった」などの発言が増え、発言することに自信ができてきた様子が観察された。セッション12では、スタッフが2学期に頑張りたいことを尋ねると「作文を書けるように頑張りたい」答えた。クイズの答えが分かった時は「分かりました」、分からない時ははっきりとした声で「分かりません」と伝えることができた。スタッフはモニターを通してC児の様子が見えなくても、音声だけで問題なくワークを進めることができた。

2.3.3 行動変容

初回ではチャットのみがコミュニケーション手段であったが、セッションを重ねるたびに、言語によるコミュニケーションが増えた。質問に答えたり、やりたいことや頑張りたいことを伝えたりできるようになった。

2.3.4 アンケートとインタビュー結果

アンケート結果を表4に示す。「⑤緊張」の項目では、来所支援よりオンライン支援で2ポイント高かった。「②安心」「⑥リラックス」「⑧気楽な」「⑨疲れる」の項目では、来所支援よりオンライン支援で1ポイント高かった。

母親へのインタビューでは「通わなくて良かったので、楽であった。オンライン支援で話ができるようになってきたので、びっくりしている」と回答した。

表4 C児のアンケート結果

項目\ポイント	5	4	3	2	1
①楽しい	●△				
②安心	●	△			
④好き		●△			
⑥リラックス	●	△			
⑦わかる	●△				
⑧気楽な	●	△			
⑩静か	●△				
⑪集中	●△				
⑫できる	●△				
⑭自由な	●△				
⑬退屈	●△				
⑤緊張		●		△	
⑨疲れる	●	△			
⑬難しい	●△				

● オンライン支援 △ 来所支援

2.3.5 考察

場面緘黙があるもオンライン支援を重ねるごとに、言語でのコミュニケーションが増えた。これを環境面と自己肯定感の観点から考察する。

① 環境面

アンケートの結果から、「緊張」「安心」「リラックス」「気楽」「疲れる」の項目で、オンライン支援でポイントが上がった。自宅で安心できる場所であったこと、隣に母親がいたこと、モニターを切っていたため自分の顔が映らなかったこと、会話する相手の目を見なくてすんだことで精神的な負担が軽減したと考えられる。また、プログラミングが好きだったことから、パソコンを利用したオンライン支援に抵抗が無く、C児の特性に合っていたため導入しやすかったと考えられる。

② 自己肯定感

言語でのコミュニケーションが苦手なC児が、安心できる環境で、自分が話したことを「分かってもらえた」ことが成功体験となった。この成功体験がスタッフとの信頼関係や自己肯定感の向上につながったため、言語でのコミュニケーションが増えたと考えられる。

2.4 D児

2.4.1 来所支援時の様子

生活リズムが不規則で昼夜逆転しており、寝てしまつて来所できないことが多かった。コミュニケーションは良好ではあったが、表情の変化が少なく、淡々と話した。中学校では不登校であったが、2020年4月から通信制高校に通い始め、授業のある日は学校へ登校できていた。学校以外の地域のイベント

や外出はしなかった。

2.4.2 オンライン支援の介入

オンライン支援では、ワークに休まず参加することを目的とした。個別ワークに参加し、ネット検索やクイズ、家での過ごし方の振り返り等の活動を中心に実施した。

オンライン支援では一度も欠席がなく、開始時間に遅れることがなかった。セッション7では朝方まで起きていて昼夜逆転している状況であったが参加した。

セッション4では「富士山には登ったことがないので一度登ってみたい」、セッション5では「小説を書きたい」と、笑顔ではきはきとスタッフに意思表示をした。セッション10では「絶景が見たい」と希望があり、Google Earthでガラパゴス諸島、エジプトピラミッド、北海道礼文島、フェロー諸島などを検索した。

来所支援と比べてオンライン支援では、活動への取り組みが良好であった。セッション2では、はきはきと話をし、全ての活動に対して集中し意欲的に取り組んだ。セッション8では、表情が非常に生き生きしており、画面を通してスタッフの話しかけに素早く答えた。

2.4.3 行動変容

オンライン支援では一度も欠席が無く、表情も非常に良く、はきはきとスタッフに意思表示することができるようになった。

2.4.4 アンケートとインタビュー結果

アンケート結果を表5に示す。「⑭自由な」の項目では、来所支援よりオンライン支援では2ポイント低かった。オンライン支援ではできないことがあるとコメントがあった。「①楽しい」「④好き」「⑨疲れる」「⑩静か」「⑫できる」の項目では、来所支援よりオンライン支援では1ポイント高かった。活動内容が楽しかった、雑音がなかった、Zoom機能が分かりやすかったとコメントがあった。「⑤緊張」「⑦分かる」の項目では、来所支援よりオンライン支援では1ポイント低かった。オンライン支援だと伝わりにくい部分があったとコメントがあった。

母親へのインタビューでは「聞こえてくる声のはきはきとしていて楽しそう。オンライン支援の方が元気ある様子。時間の面でもオンライン支援では負担なく受けられるので可能であれば継続して受けられると安心」と回答した。

表5 D児のアンケート結果

項目\ポイント	5	4	3	2	1
①楽しい	●	△			
②安心	●△				
④好き	●	△			
⑥リラックス	●△				
⑦わかる	△	●			
⑧気楽な	●△				
⑩静か	●	△			
⑪集中	●△				
⑫できる	●	△			
⑭自由な	△		●		
③退屈		●△			
⑤緊張	△	●			
⑨疲れる	●	△			
⑬難しい		●△			

● オンライン支援 △ 来所支援

2.4.5 考察

アンケート結果から、来所支援よりオンライン支援の方が疲れなことが分かった。オンライン支援で一度も欠席が無く、笑顔の表情ではきはきとスタッフに意思表示することができた。その理由は、普段の生活でも学校以外に外出することはほとんどないD児にとって、オンライン支援は、精神的にも身体的にも負担が少なく安心して取り組めたことが考えられる。ただ、オンライン支援では、活動内容に限界があることや伝わりにくい部分があることが考えられる。

IV. 研究2：オンライン支援を利用した保護者を対象とした調査

1. 方法

1.1 対象

放課後等デイサービスを提供する事業所で、オンライン支援を利用した保護者を対象とした。事業所は研究1で述べたT市のa事業所、b事業所とK市に位置するc事業所、d事業所の計4事業所であった。c事業所とd事業所では小学生～高校生を対象にサービスを提供していた。a事業所では30名、b事業所は31名、c事業所は13名、d事業所では6名の計80名がオンライン支援を利用した。これは、利用者全体の34%であった。K市は5月末の学校の臨時休校の終了に伴い、オンライン支援も終了した。T市はコロナ感染症予防の観点より、必要に応じて学校再開後も認められている。

1.2 手続き

2020年5月7日、オンライン支援を利用している80名の保護者に対してメールでアンケートを送信し回答を依頼した。回答期間は5月17日までの10日間であった。アンケートはオンライン上で回答できるGoogleフォームを使用した。

1.3 アンケート内容

質問内容は「①オンライン支援に子どもが楽しく参加しているか」「②どんなワークを受けたか」「③オンライン支援を受けることに対して、保護者がどう感じたか」「④学校が再開になった後も、オンライン支援を利用したいか」「⑤（はいと答えた人のみ）④の理由」について回答を求めた。最後に「⑥オンライン支援に対する要望」を自由記述方式で求めた。

①に対しては「楽しく参加している」「まあまあ」「あまり楽しく参加していない」の3段階で回答を求めた。②③に対しては当てはまる項目を選択するように求めた。④に対しては「はい（来所支援と併用も含む）」「検討をしたい」「いいえ」の3項目から選択するように求めた。⑤に対しては当てはまる理由を選択するように求めた。②③⑤は複数回答を可能とした。

アンケートに記載のある「WEBワーク」はオンライン支援におけるワークを意味している。

1.4 分析方法

各内容において、回答人数や割合を算出して比較した。⑥については、回答を列記した。

1.5 倫理的配慮

無記名にて記入を依頼した。オンライン上での回答で同意を得たこととした。

2. 結果

2.1 回答

回答者は80名中65名、回答率は81%であった。

2.2 「①オンライン支援に子どもが楽しく参加しているか」について（図1）

「楽しく参加している」は80%（52人）、「まあまあ」は12.3%（8人）、「あまり楽しく参加していない」は7.7%（5人）であった。

2.3 「②どんなワークを受けたか」について（図2）

回答のあった65名中53名が「個別ワーク」を受けていた。それ以外は集団ワークであり、22名が「運動教室・エクササイズ」、16名が「クイズ大会・脳トレ」、10名が「生活スキル（時間の使い方等）」、5

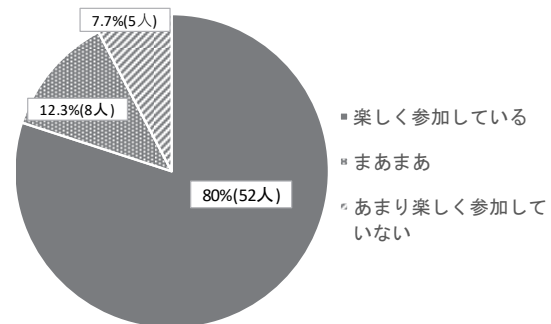


図1 ①における結果

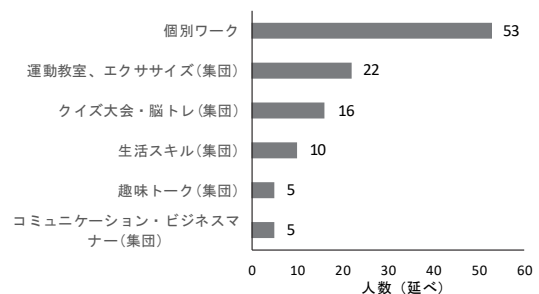


図2 ②における結果

名が「コミュニケーション・ビジネスマナー」であった。

2.4 「③オンライン支援を受けることに対して、保護者がどう感じたか」について（図3）

57名が「コロナ感染防止のため安心して利用できる」、40名が「継続した支援が受けられるので安心である」、28名が「子どものいつもと違う活動の様子が見られて嬉しい」であった。オンライン支援を利用して「安心」「嬉しい」と回答が得られた一方で、12名が「可能であれば来所支援が望ましい」、2名が「WEBに接続するのが面倒」と回答した。

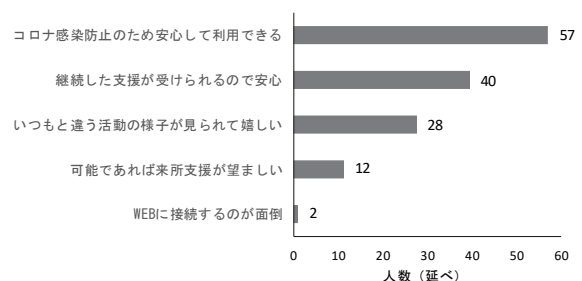


図3 ③における結果

2.5 「④学校が再開になった後も、オンライン支援を利用したいか」について（図4）

「はい（来所支援と併用も含む）」は70.8%（46

人)が、「検討したい」は21.5%(14人)、「いいえ」は7.7%(5人)であった。

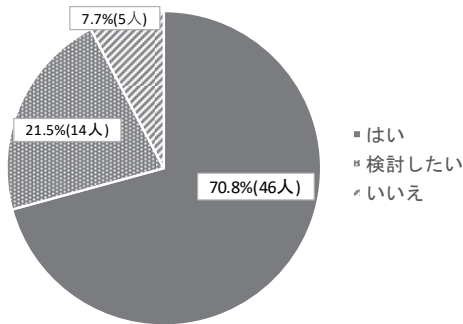


図4 ④における結果

2.6 「⑤学校が再開になった後も、オンライン支援を利用したい理由(④ではいと答えた人のみ)」について(図5)

46名中41名が「コロナに不安があるため、WEBワークの方が安心である」であり、コロナ感染症予防の観点よりオンライン支援の継続を希望している。28名が「送迎をする必要がないので、WEBワークの方が参加しやすい」、19名が「親の仕事の都合により、WEBワークでは支援を受けやすい」であった。11名が「子どもが自分の表情や行動を画面で確認できるので、常に振り返りができる」であった。他には「集団が苦手なのでWEBワークでは参加しやすい」「外出すると体調に負担がかかるので受けやすい」「授業や部活で時間に間に合わない時も参加できる」「家から出ることが目的なので、WEBワークばかりになると困る」と回答が得られた。

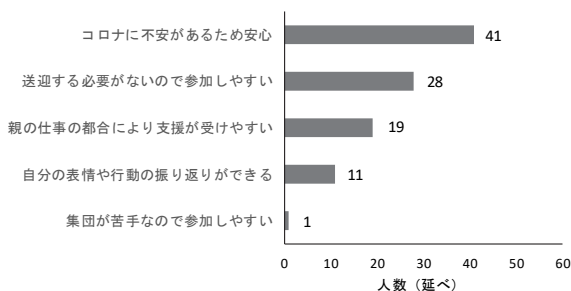


図5 ⑤における結果

2.7 「⑥オンライン支援に対する要望」について

自由記述による回答を以下に箇条書きで示した。

- ・コロナで外出できない中、誰にも会えず悶々としているので、話ができ気持ちを切り替えられるのはありがたい。
- ・WEBワークも来所支援のように、曜日や時間を決めて定期的な支援があれば嬉しい。

- ・WEBワークは楽しかったようで、机に向かっていている間、背筋をピンと伸ばしていた。
- ・送られてくるURLでつながらない場合、助けを求める練習にもなって良い。
- ・WEBワークだと時間がある時に参加でき、家族がその様子を近くで見られる点でも良い。
- ・読み書きができない子でも簡単にできるクイズやなどなど、工作などがあると更に参加しやすい。
- ・WEBワークはリモートで可能な内容に限定される。支援内容による向き不向きが出やすい。
- ・来所の時は活動の様子が聞けていたが、WEBワークになってからワーク内容や様子が分からない。
- ・WEBワークの時、「聞こえない」と言いにくい時がある。
- ・物作りが出来ないので、物足りない。
- ・親がつながなくてはいけないので、時間が限られるのが厳しい。

3. 考察

80%(52人)が「楽しく参加している」と回答していることや、自由記述より「WEBワークが楽しかった」という意見が得られたことから、全体的に楽しく参加できていると考えられる。一方、7.7%(5人)が「あまり楽しく参加していない」と回答しており、自由記述より「WEBワークはリモートで可能な内容に限定される。支援内容による向き不向きが出やすい」の回答が得られた。オンライン支援では内容が限定されたことや、一部の子どもではオンライン支援での取り組みが難しかったことが考えられる。

個別ワークと集団ワークへの参加人数は同じであり、どちらも53名が参加した。学校が臨時休校中は、スタッフだけでなく他児との交流を求めていることや、発達障害等の特性上、環境面でオンライン支援における集団ワークへ参加しやすかったと考えられる。

オンライン支援を受けることについて、57名が「コロナ感染防止のため安心して利用できる」、40名が「継続した支援が受けられるので安心である」と回答したことより、コロナ禍におけるリスクは回避しつつ、支援の継続は求めていると考えられる。また、学校再開後も70.8%(46人)がオンライン支援の継続を望んでいた。「コロナ感染症予防」の理由が41名と多く、状況に応じて、来所支援に加えオン

ライン支援を受けられることを希望していると考えられる。

加えて、47名より「親の仕事の都合や送迎の必要性よりオンライン支援が受けやすい」と回答を得たことより、オンライン支援では保護者の送迎の負担が軽減されると考えられる。また、「子どものいつもと違う様子が見られて嬉しい」や「子どもが自分の表情や行動を画面で確認できるので、常に振り返りができる」と回答が得られた。これはコロナ感染症予防の観点のみでなく、保護者は観察された子どもの反応からオンライン支援の必要性を感じ取っていると考えられる。

V. 総合考察

1. 発達障害特性におけるオンライン支援の適応

発達障害の特性として、まず視覚優位が挙げられる。画面を見ながら活動に参加できることは、活動内容が分かりやすく、取り組みやすいと考えられる。ICTが得意な発達障害の子どもたちにとっては、オンライン支援は興味を持ちながら参加できる手段として考えられる。また、聴覚過敏の子どもでは、家庭での静かな環境は集中できる環境であると考えられる。

一方、一部の子どもたちではオンライン支援での取り組みが難しかった。理由として、言語理解が難しく声かけや視覚的手がかり以外の身体的な誘導等が必要な子どもたちにとっては、画面の前に座り活動を継続することが難しいと考えられる。家族と一緒だからこそオンライン支援に取り組めた子どももおり、子ども一人一人に合わせた参加方法の工夫は重要であると考えられる。さらに、オンライン支援では、活動の限界やスケジュール管理の必要性、目の疲労、通信の不安定等、課題が残されている。

集団活動に参加することが難しい子どもたちにとって、対面せずに他児と一緒に活動に参加できる機会は貴重であると考えられる。自分の能力をスタッフや他児に称賛されることで成功体験が得られる経験は、次の活動の参加への動機付けにつながると考えられる。特に場面緘黙の子どもにとっては、画面に顔を出さない状態でも実施できるため、参加への抵抗感が無く、参加への段階付けがしやすいと考えられる。

2. オンライン支援という新しい支援体系

今回、コロナウイルス感染症予防の観点より、オンライン支援を開始したが、保護者の送迎や通うこと自体の負担軽減につながったり、来所支援とは違う子どもの側面が観察されたり等、新しいニーズが見えてきた。行き渋りや、社会とのつながりが少ない利用者に対して、「来所する」ことを目的の一つであると考えていたが、オンライン支援では一度も欠席がなかったことから、オンライン支援では精神的な負担なく事業所を利用できるメリットがあると考えられる。このことより、来所支援に加えてオンライン支援も今後の支援のあり方の一つとして確立できる可能性があると考えられる。オンライン支援を実施することで、スタッフの在宅勤務も可能となったことから、今後の働き方の可能性も広がると考えられる。

3. 今後の地域におけるオンライン支援のあり方

学校の臨時休業に伴い、放課後等デイサービスである事業所でオンライン支援を実施した。オンライン支援を利用した利用者の割合は34%にとどまったが、一人当たりの利用回数は増加していた。オンライン支援において、言葉や画像（スライド、ホワイトボード、動画、スタッフの見本等）を利用することから、学習や運動、創作活動等の様々な活動を展開することができると考えられる。そのため、放課後等デイサービスを始め、学校、塾、運動や手芸教室等、様々な場所で活用できると考えられる。

また、オンライン支援には精神的な負担がなく参加しやすかったこと、集団ワークにも参加できたこと等、対人恐怖症や場面緘黙、不登校の子どもたちの支援の可能性があると考えられる。社会的なつながりが無い子どもたちが、オンライン上で自分の好きな話題を共有したり、一緒に活動ができる居場所を見つけ、人とのつながりが広がることが期待される。

謝辞

本研究をすすめるにあたり、実践ならびに調査にご協力くださいました対象児および保護者の皆様に心から感謝いたします。

文献

株式会社ベネッセホールディングス（2020）：親子の生活
における新型コロナウイルス影響調査。

<<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000809.000000120.html>>（2020年10月12日閲覧）

厚生労働省（2020）：障害者福祉統計情報。

厚生労働省（2020）：新型コロナウイルス感染防止のための
小学校等の臨時休業に関連した放課後等デイサービスに係るQ&Aについて（4月13日版）。

文部科学省（2020）：特別支援教育資料(令和元年度)。

（2020年10月20日受付）

（2020年12月8日受理）